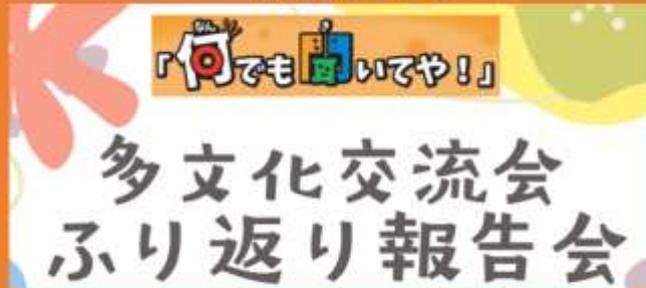


令和7年度



令和8年2月1日（日） 午後2時～午後4時

実施報告書

令和8年2月

主催 公益財団法人大阪国際交流センター

協力 NPO 市岡国際教育協会(市岡日本語教室)

大阪識字・日本語教室

**(矢田しきじ教室、立葉識字・日本語交流教室、
出来島識字・日本語交流教室、平野識字教室)**

この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成を受けて実施しました。

■はじめに

当財団では、日本人住民と外国人住民が地域でつながり、誰もが安心して暮らせるまち・大阪をめざし、令和 3 年度から令和 6 年度にかけて、大阪市社会福祉協議会様との共催・協力のもと、大阪市内の各区で、「多文化交流会」を開催してきました。

この多文化交流会では、外国人住民のみなさまから大阪への思いや、これまでの生活の中で感じた「良かったこと」「困ったこと」などをお話しいただくとともに、日本人住民のみなさまからも、外国人住民に聞いてみたいことや伝えたいことを共有し、相互理解を深める場として取り組んできました。

特に令和 7 年度からは、日本人住民と外国人住民がより地域でのつながりを深めることができるよう、外国人にとっての居場所やセーフティネットの役割も果たす「地域の日本語教室」を拠点に、市内 5 カ所で「多文化交流会」を実施しました。

地域の日本語教室での開催時には、日本語を学ぶ外国人学習者とボランティアのみなさまに加え、地域の役員、区役所、区社会福祉協議会、NPO 団体の方々にもご参加いただきました。こうした多様な立場の方々が地域の日本語教室に会い、対話・交流することで、地域での顔の見える関係づくりのきっかけを提供できたと感じております。

これらの実施を通じて、お互いの文化の違いを知り、理解し合うことによって、みなさまが暮らす地域で顔の見えるお付き合いが広がっていくとともに、この取組みがさらに発展し、地域の自主的な活動として広がることで、誰もが安心・安全に暮らせる魅力あるまち・大阪の実現につながると信じています。

今後も、「地域の日本語教室」を拠点とした多文化交流の取組みをさらに発展させ、地域のみなさまとともに顔の見える関係づくりを進めてまいりたいと考えています。

引き続き、本事業へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 大阪国際交流センター
理事長 岸本 孝之

■開催概要

1 趣旨・目的

令和3年度から6年度まで、日本人住民と外国人住民が互いに顔の見える地域社会の構築をめざし、大阪市社会福祉協議会との共催により各区で多文化交流会を実施してきた。本事業では、令和2年度に大阪市の委託により作成したガイドブック「何でも聞いてや！」等を活用してきたが、従来の開催手法では、地域に暮らす外国人住民と日本人住民との継続的なつながりづくりに課題があった。

今年度は、地域でのつながりをさらに深めるため、外国人住民の居場所やセーフティネットの役割を担う「地域の日本語教室」を中心に開催し、そこで活動するボランティアの力を借り、近隣住民や区役所、区社会福祉協議会等の関係機関を巻き込むことで、地域全体で支え合うきっかけづくりをめざし実施した。

今回のふり返し報告会では、今年度実施した各教室のコーディネーターや外国人スピーカーに登壇してもらい、活動内容や新たな気づき、その後の成果等を共有する機会とし、今後、参加者が自地域での取り組みをさらに発展させるためのアイデアを交換し、今後の活動につながるきっかけ作りの場とした。

2 開催日時および場所

令和8年2月1日(日) 午後2時～午後4時 大阪国際交流センター 3階 中会議室・いちよう

3 参加者

30名(一般公募による参加者等)

4 内容

- (1) 令和7年度「多文化交流会」実績報告(事務局)
- (2) 各開催地域教室からの報告 ファシリテーター 梅元理恵 ((公財)大阪国際交流センター事務局長)
 - ・地域の教室(5教室)からの実施前と後の感想やコメント
 - ・多文化交流会に参加した外国人の感想やコメント
 - ・質疑応答
- (3) グループディスカッション
 - ・グループに分かれて各区との意見交換(2回ローテーション)
- (4) グループ発表・まとめ

<登壇者> ファシリテーター 梅元 理恵

パネリスト (各教室のコーディネーター5名(5教室)、外国人スピーカー5名)

【市岡日本語教室】

コーディネーター: 大城 二三子 さん 外国人スピーカー: チョウ ウセン さん (中国)

【矢田しきじ教室】

コーディネーター: 小野 栄一 さん 外国人スピーカー: 高 岩 さん (中国)

【立葉識字・日本語交流教室】

コーディネーター: 安永 千鶴 さん 外国人スピーカー: ユヘンヨ ラスティ ジョセフ さん (フィリピン)

【出来島識字・日本語交流教室】

コーディネーター: 福留 まさ美 さん 外国人スピーカー: アフマザイ ビビ アイシャ さん (アフガニスタン)

【平野識字教室】

コーディネーター: 下元 日登美 さん 外国人スピーカー: ヴォ グエン ヴ さん (ベトナム)

■多文化交流会ふり返し報告会総括

1 令和7年度の実績報告(事務局から報告)

- (1) 開催回数 5回
- (2) 参加者数 131名(うち、外国人 69名) ※通訳14人含
- (3) 開催実績

①市岡日本語教室(港区)	令和7年10月17日(金)	<u>テーマ:日本に住んで思うこと</u>
②矢田しきじ教室(東住吉区)	令和7年10月22日(水)	<u>テーマ:防災</u>
③立葉識字・日本語交流教室(浪速区)	令和7年11月26日(水)	<u>テーマ:日本に住んで思うこと</u>
④出来島識字・日本語交流教室(西淀川区)	令和7年12月23日(火)	<u>テーマ:日本の生活</u>
⑤平野識字教室(平野区)	令和8年1月13日(水)	<u>テーマ:母国と比べて日本の良いところ、悪いところ</u>

2 各教室報告(ファシリテーター 梅元 理恵)

- (1) はじめに、各教室のコーディネーターの皆さまからは、運営面での成果や課題、印象的なエピソードについて。学習者(外国人スピーカー)の皆さまからは、参加による自身の変化や、その後の活動状況などについて報告。

①【市岡日本語教室】

(コーディネーター)

港区で活動している。普段、私たちの教室にたくさんの学習者(外国人住民)が来るが、名前も知らない学習者(外国人住民)も多いのでそうした学習者(外国人住民)と、生活の様子や感じていることを話すことが本当に良かった。また、日本語教室同士の横のつながりが少ないと感じていたので、今回他の教室(識字教室など)と一緒に活動できたことも、いい機会になった。

多文化交流会当日、グループディスカッションの中で学習者から「行政の書類が難しい」という声があった。書類が難しいと手続きに時間がかかり、それが外国人の皆さんの「阻害感」にもつながってしまうので、ここは改善していただきたいと感じた。また、テーマを決めずに自由に話すぎたという反省点がある。今後はテーマをいくつか絞って話し、その後にフリートークにするのがいいかもしれない。また、進行役を置かずにグループに任せただけで、話を引き出すのに時間がかかったり、話が偏ったりした。

教室運営側としての反省では、後で報告を聞くだけでは、どういう経緯でその結論になったのかが見えないので、今後はスタッフが各グループに一人ずつ入り、後でしっかり報告会ができるようにすることで、貴重な機会を自分たちの学びにつなげていきたいと思った。

(外国人スピーカー)

今回の多文化交流会で、同じグループの皆さんと意見を交わし、一人一人の考え方や背景にある文化の違いを理解することができた。互いの文化を尊重することは、日本で暮らす上でとても大切だと感じている。

新しい言葉を学ぶことは、相手の文化を知ると同時に、自分自身の文化を見直すきっかけにもなる。こうした場があることに感謝し、ここで学んだことや経験を、周りの友人たちにも伝えていきたい。

②【矢田しきじ教室】

(コーディネーター)

私たちの教室は、もともとは同和地区の住民が文字を取り戻そうという運動から始まったが、この数年は、外国人が日本語を学ぶ場になっている。活動しているボランティアのこだわりもあって、今も「識字教室」という名前で続けている。

今回は、10月に「防災」をテーマに多文化交流会を実施した。当日は、外国人の学習者に加えて、区役所、町会、NPO、社協の皆さんなど、多方面から参加していただき、とても活発な会となった。最初はゲーム形式で防災の話をし、後半はグループに分かれて多文化交流会を実施した。日本人住民と学習者(外国人住民)が、お互いに質問したり意見を出し合ったりして、非常にいい時間になった。

今回は学習者(外国人住民)が少なかったが、次はもっと増やせるように工夫したい。また、昔はお祭りに参加したこともある。これからも地域の行事に積極的に参加して、地域の皆さんと顔の見える関係を作っていきたい。こうした多文化交流会は初めてだったが、次はまた違うテーマでぜひ続けていきたいと思う。

(外国人スピーカー)

私は、日本で生活している外国人の家族の一員として、文化の壁や言語の壁、在留資格制度の不確実性などにより、日々さまざまな不安を感じている。この不安は大人だけでなく、子どもに安定した生活や学習環境を提供できるかどうかにも関係しており、常に心配している。

そのような中で、日本語教室の多文化交流会は、私たちにとって非常に心に残るものであった。この活動を通して、私たちは決して一人で悩んでいるのではなく、多くの方々が私たちを支え、陰で力を尽くしてくださっていることを実感した。ここで支えてくださったすべての方々に心から感謝するとともに、今後は自分の力をこの社会に役立て、貢献していきたいと思う。

③【立葉識字・日本語交流教室】

(コーディネーター)

「日本に住んで思うこと」をテーマに話し合ったが、これがとても良かった。普段テキストを使った学習ではなかなか出てこない「本音」をたくさん聞くことができた。通訳者のサポートがいてくださったのも、深い話をする上で大きな助けになった。学習者の感想の中で一番印象的だった「助かりました」という言葉があった。ある女性が、夫の留守中に自分も子どもも高熱を出してしまい、どうしていいか分からずパニックになったとき、教室のような「話を聞いてくれる場所」「教えてくれる場所」があることが、どれだけ支えになったかという話であった。それを聞いて、私たちも「楽しい」以上に、お役に立てて本当に良かったと胸がいっぱいになった。

多文化交流会での改善点としては、今回リハーサルも重ねて準備してきたが、せっかく練習した外国人スピーカーの話を、グループ内だけでなく全体の前でも発表してもらえば良かったなと思った。そうすれば、学習者がもっと自信を持ってもらえたはずだし、参加者全員でその思いを共有できたはずである。あとは「時間が短かった」という声が出るほど盛り上がったので、次回の時間配分に活かしていきたい。

(外国人スピーカー)

フィリピンから日本に来て、今年で10年になる。多文化交流会では「日本に住んで思うこと」というテーマだったが、私は具体的な困りごとがすぐには思い浮かばなかったため、「日本で驚いたこと」としてホームレスの方々の現状について話した。参加者の皆さんの意見を聞く中で、日本の社会構造や福祉の現状について、以前よりも深い理解を得ることができた。特に、昔に比べて生活環境が改善されていることも知り、安心した。

また、他の学習者(外国人住民)から「銀行口座が作れない」「日本人とのコミュニケーションが難しい」といった悩みがあったが、私自身はそうした経験が少なかったため、当初は共感しきれない部分もあった。しかし、それをきっかけに「なぜ自分は困らなかったのか」を考えてみた。振り返れば、私は「日本で暮らす以上、日本のルールややり方に自分を合わせるべきだ」と考え、実践してきたことに気づいた。まさに「郷に入っては郷に従え」の精神である。この10年間の経験を活かし、これからは他の外国人住民が日本で困ることのないよう、私なりの考え方や経験を少しずつ共有していきたいと考えている。

④【出来島識字・日本語交流教室】

(コーディネーター)

当教室は毎週火曜日の夜間に開催しており、今回の多文化交流会もその時間帯に合わせて実施した。普段の教室は、開始前(18時40分頃)から熱心に学習者(外国人住民)が集まるほど「学習」が中心の場となっている。そのため、学習者(外国人住民)の皆さんが日頃感じている思いや気持ちをじっくり話す機会がなかなか持てなかった。今回の多文化交流会は、そうした日常の思いを共有する非常に意味のある場となった。

一昨年度、試行的に当教室で実施した多文化交流会は周知不足もあり少人数の参加者での開催であったが、今年度は(公財)大阪国際交流センターや区役所の協力を得て、多くの方に参加いただくことができた。一方で、人数が増えたことでグループ分けや運営の難しさも実感した。テーマが多岐にわたり、議論を深くまとめることが難しかった点は今後の反省点である。

(外国人スピーカー)

多文化交流会に参加したことで、他国の文化への理解が深まった。特に、コミュニケーションにおいて「人の話を聞き、尊重すること」の重要性を改めて実感した。また、日本人参加者や他国の人と対話したことで、自分の経験を共有することに対して前向きな自信を持つことができた。

この多文化交流会は、私にとって地域社会へ積極的に関わっていこうとする大きな後押しとなった。引き続きこうした活動に参加し、異なる文化を持つ人々との相互理解を深めることに貢献したいと考えている。

⑤【平野識字教室】

(コーディネーターから)

当教室も他の識字教室と同様、長い歴史の中から生まれた教室である。現在は大半が外国人学習者だが、70代前半の日本人女性が1人通っている。その人は、幼少期に十分な教育を受ける機会がなく、長年読み書きに不自由を感じていた。現在は体調を整えながら、「あいうえお」から一歩ずつ、非常に意欲的に学んでいる。

1月13日に、外国人12名、日本人8名、ボランティア等を含め約25名で多文化交流会を実施した。狭い教室が満員になるほどの盛況ぶりで、6つのグループに分かれて対話を行った。「母国と比べて日本の良いところ、悪いところ」をテーマに交流をした。通訳者のサポートもあり、学習者(外国人住民)の皆さんが安心して本音を話せる環境が整っていたことが成功の要因だと感じた。

普段の学習だけでは見えない、一人一人の深い考えに触れることができた。国籍に関わらず、考え方は三者三様であり、対話を通じて「共通点」と「個々の違い」の両方を理解できたことは、日本人・外国人双方にとって「共通理解」を深める貴重な機会となった。また、当教室の学習者(外国人住民)は非常に積極的で、「自分が発表したい」と手を挙げてくる人が多かったことも、運営側として大変うれしい驚きであった。

(外国人スピーカー)

日本人の皆さんが、私たち外国人の文化や実生活に深い関心を持ってくださっていることを知り、大変心が動かされた。(公財)大阪国際交流センターのスタッフやボランティアが、安心して交流できるよう細やかな計画を立て、温かい雰囲気を作ってくださったことに心からお礼を言いたい。

この多文化交流会で「人と人とのつながり」を肌で感じたことは、私にとって大きな励みとなった。そのおかげで、日本での生活に対してより前向きな気持ちになることができた。これからも、単に日本語を習得するだけでなく、日本の文化への理解を深める努力を続けたい。

(2) 続いて、学習者から、「もし次回参加するなら、やってみたいことや、こんなテーマで話したい」という希望や、教室のコーディネーターの皆さんから、教室にとってプラスになったことや気づいた点、今後の継続の可能性についてのご意見をいただいた。

①【市岡日本語教室】

(外国人スピーカー)

今後は、日本の地域の人と仕事や勉強以外で、いろいろなイベントに参加して交流したい。そうすることで日本の生活をより深く理解でき、地域社会にうまく溶け込めるようになると思う。

(コーディネーター)

今回は準備不足を感じた点もあり、次回はさらに準備を整えて参加したい。私たちの活動は言葉に特化しているが、単発の開催で全てを伝えるのは難しい。一昨日も警察の人に来てもらい「自転車のルール変更」について案内したが、リーフレットの日本語が難しく、正しく情報が伝わったか不安が残った。こうした「伝わる資料」を横のつながり(地域の日本語教室の間)で共有・整理していければと思う。

現在、私たちの教室に学習希望者が多すぎて、やむを得ず「人数制限(登録制限)」をしている。これが地域とのつながりを遮断していると感じ、非常に心苦しく思っている。まずは日本語の分からない外国人が1人でも多く日本語を学べるよう、生涯学習センターや(公財)大阪国際交流センター等の協力で、大規模なクラス編成などの機会を作っていただけないかと思う。

②【矢田しきじ教室】

(外国人スピーカー)

交流会を通じて、中国という広い国の中でも地域ごとに感覚が違うように、国が違えばさらに多くの違いがあることを再認識した。今後は日本語や日本文化を勉強するだけでなく、自分の国の文化についても皆さんに詳しく伝えられるよう頑張りたい。以前参加した遠足や餅つき大会でも日本文化を肌で感じる事ができた。もっとスムーズに交流できるよう、これからも日本語を頑張りたい。

(コーディネーター)

今後もぜひこうした機会を継続したい。教室独自でも「ほうとうを食べる会」や「書き初め」など、日本文化に触れる企画を検討しているが、なかなか実行できていないのが現状。今後は、中国・韓国・ベトナムなど各国の習慣を互いに紹介し合える場を作りたい。次回はテーマをさらに絞り、文化だけでなく「教育問題」など、学習者が抱える具体的な悩みについても深く話し合えるようにしたい。

③【立葉識字・日本語交流教室】

(外国人スピーカー)

今回のような話し合いの場だけでなく、もっと体を動かしたり、一緒に何かを作ったりする活動にも挑戦してみたい。例えば、手芸や料理といった共通の趣味を通じて日本文化を学び、日本人住民と自然に交流できればうれしい。

(コーディネーター)

普段はどうしても、私たちボランティア側から一方的に話題を提供してしまいがちである。しかし、今回の交流会を通じて、学習者の皆さんが持つ「異なる視点」に改めて気づかされた。今回得られた気づきを大切にしながら、これからも皆さんと親しく交流し、より一人ひとりに寄り添った適切な支援やアドバイスができるよう努めていきたい。

④【出来島識字・日本語交流教室】

(外国人スピーカー)

外国人住民がどのようにして、日本での日常生活や日本社会に適応していくべきかというテーマで話し合いたい。また、語学学習や、異なる文化を持つ人々の間でのコミュニケーションについても非常に関心がある。

(コーディネーター)

2 回目の開催となり、今回は区役所の方々をはじめ、区の社協(区社会福祉協議会)、各種団体、NPO など、多方面から多くの方にご参加いただいた。皆さまの関心の高さを肌で感じ、私たちの教室の活動が地域に認知されていることを改めて自覚した。

次回に向けては、「子育て」「教育」「生活上の困りごと」など、関心事に合わせてグループを分ける「テーマ別開催」を検討してはどうか。そうすることで、より当事者のニーズに沿った交流が可能になると思う。今後も地域で暮らす外国人住民に対して、より多くの方が関心を持っていただけるよう、つながりの架け橋としての役割を果たしていきたい。

⑤【平野識字教室】

(外国人スピーカー)

今後もぜひ参加したい。次は私だけでなく、私の周りの仲間も一緒に参加できればうれしい。その機会があれば、ベトナムの文化や歴史についても紹介したい。

(コーディネーター)

先ほどのスピーカーの方々のお話がとても楽しそうだったので、ぜひ今後もこうした機会を続けていければと思う。先ほどベトナムの文化紹介のお話もありましたが、自国の文化を紹介したい方はたくさんいるはずで

ある。そうした発表の場を、私たち日本人が共に作っていく姿勢も大切だと感じた。

(3) 質疑応答

【質問】「日本人との交流」についてききたい。留学生から「日本人の友達がなかなかできない」という悩みをよく聞かすが、ラスティさんのようにお友達が多い人もいる。外国人が日本でどのように人間関係を築いていくのか、ラスティさんはどうやって友人を作ったのか教えてほしい。

【回答】(ラスティさん): 私の場合、「自分が他の人にシェアできるものは何か？」を考えたことがきっかけだった。私は英語を話すことができるので、英語を学びたい日本人を探し、語学交流という形で交流を始めた。そこから自然と友人が増えていった。例えば中国語であれば、中国語を学びたい日本人とつながるなど、自分の持つ「言語」や「スキル」をきっかけに交流を深めるのが良い方法だと思う。

【ファシリテーターのコメント】

「興味を持ってくれている人とつながっていく」という工夫やきっかけがあれば、日本人も交流したい人はたくさんいるはず。私たちもそういうプログラムを実施しているので、ぜひ参加して次へ進んでほしい。

日本の文化を知ってもらうことも大事だが、私たち日本人が皆さんの国の文化を知ることも本当に大切だということを、今日改めて皆さんから教えていただいた気がする。コーディネーターの皆さんも「続けていきたい」と言ってくださっているので、ぜひそれぞれの教室に合った形で継続していただきたい。

ただ、市岡日本語教室さんからの課題にもあったが、今どこも学習者が増えていて「待機者」が出ている状況である。私たちも初心者向けの教室を増やしてはいるが、やはり限界がある。国に対しても「もっと日本語教育の機会を作ってほしい」と意見を出し続けているところである。先月発表された「外国人の受入れ・秩序ある共生のための総合的対応策」でも日本語教育について触れられていたが、すぐに状況が変わるかどうかは分からない。

それでも、やはり顔を合わせて話をする事、そして日本語を学ぶ機会を守ることは非常に大切である。これからもその必要性をしっかりと訴え続けていきたいと思っている。

3 グループディスカッション

・3つの班に分かれて参加者との意見交換

(1班:市岡日本語教室、2班:矢田しきじ教室・平野識字教室、3班:立葉識字・日本語交流教室・出来島識字・日本語交流教室)

・各参加者の希望の班に参加し、ローテーションして、2回実施。各回10分ずつ)

4 グループ発表・まとめ

(1) 1班【市岡日本語教室】

教室の活動内容や運営に対して多くのご質問があった。関心を持ってくださり大変うれしい。その中で、「多文化交流会を開催する際、地域住民の方も参加しているか」「もっと一般の地域の方にも来てもらった方がよいのではないか」という意見があった。今回は行政関係の方には参加してもらったが、一般の地域住民の参加は少なかったかもしれない。今後、どのようにPRを行えばより広く地域の人に足を運んでもらえるか、改めて考えるきっかけとなった。

(2) 2班【矢田しきじ教室、平野識字教室】

各参加者から様々な質問があった。具体的には「どのような学習方法をとっているか」「日本語を全く話せな

い初心者に対しては、どういった対応をしているか」といった教室の運営面のことや、先ほど実績報告でも話題になった「友達を積極的に作るためには、どのような取組みが有効か」といった前向きな質問もあった。

これらの質問や意見に対し、いくつか回答はした。ただ、反省点として、コーディネーターが中心に答えてしまう場面が多く、学習者である外国人の皆さんが直接答える機会が少なかった。もっと当事者の人に質問が届き、彼らの言葉で語ってもらう場面を作れば良かった。

(3) 3班【立葉識字・日本語交流教室、出来島識字・日本語交流教室】

まず「区の広報紙をどう読んでもらうか」について話があった。多言語化は大変だが、今は AI 翻訳や二次元コードを使って「やさしい日本語」で読むこともできる。うちの教室でも、広報誌をテキスト代わりにして「今月はこんな行事があるね」と話し合ったりして、学習ツールの一つとして活用している。

また、万博でボランティアをした人がいたので、せっかくの経験をぜひ日本語教室でも活かしてほしい。今、どの教室も活動ボランティアが足りなくて困っている。月 1 回からでも大歓迎。曜日や教室の雰囲気もそれぞれ違うので、ぜひ色々な教室に行ってみて、交流を続けてほしい、とお伝えした。

最後は「日本のニュースをどう見ているか」という質問があった。やはり普通のニュースは難しいという声が多く、「やさしい日本語」のニュースアプリを使って勉強しながら情報を得ている、といった話をした。

(4) まとめ

各グループで活発な意見交換や質疑応答が行われ、非常に実りある議論がなされた。私たちが開催している「多文化交流会」の目的は、主に次の 3 つである。

1. 学習者と地域とのつながりづくり
2. 日本語教室と(公財)大阪国際交流センターの連携強化
3. 災害時における正確な情報提供体制の確立

日本の地域社会では高齢化が進む一方、外国人住民の多くは 20 代・30 代の若い世代である。お互いを知り、理解し合うことで、地域でしばしば課題となる騒音やごみ出しといった生活トラブルも「知らないからできない」から「声を掛け合って解決する」ことができるようになるはずである。まずは挨拶から始めてほしい。日本語が完璧でなくても挨拶は通じる。その一歩が、安心、安全なまち・大阪を作る第一歩になる。

地域のことは教室のボランティアの皆さんの方がよく知っておられ、学習者(外国人住民)の相談にも対応していただいていると思うが、制度や施策など教室で対応に困る相談を受けた際は、いつでも(公財)大阪国際交流センターに連絡してほしい。教室と我々が連携することで学習者(外国人住民)により安心を届けることが可能になり、誰もが災害時にも安心して安全に暮らせるまちとなっていくことが期待できる。

今後、我々もこの活動を続けていくので、ここにいる皆さん全員のご協力をお願いしたい。

■事業の成果 ～アンケート結果から見えてくること～

昨年度、出来島識字・日本語交流教室にて試行的に実施した「多文化交流会」の成果を基に、今年度は、外国人にとっての居場所やセーフティネットの役割を果たす「地域の日本語教室」を拠点とし、市内5カ所で実施した。「多文化交流会」では、参加者にその地域の外国人住民の状況を知ってもらうため、財団から、日本、大阪市とその地域(区)の状況についての説明を講義形式で行った。外国人住民数や在留資格等状況など、主に、数値やデータを示すことにより、改めて身近に外国人住民が存在することについて、客観的に認識してもらえる場となった。

今年度は、各教室に通訳者を適切に配置したことで、言語の壁を越え、学習者と地域住民が互いの背景や思いを深く共有する貴重な機会となった。アンケートでは「対面で話し合うことが安心できる地域づくりにつながる」という声が寄せられ、日本人・外国人双方の満足度が100%に達するなど、お互いの心理的なハードルを下げるのに役にたった。また、地域住民に加え、区役所や区社会福祉協議会、NPO 団体等の関係機関が参画したことで、地域全体で外国人を支えるプラットフォームとしての第一歩を踏み出すことができた。住民同士だけではなく、財団や他の関係機関と教室との間にも顔の見える関係が構築されたことにより、多文化交流会をきっかけとして、学習者の抱える生活課題を適切な専門機関へつなぐ支援ルートの確立にもつながった。一方、コミュニケーションにおいて、通訳者に頼りすぎて会話が停滞する場面や、日本語レベルの差により交流が難しかったケースも見受けられたが、参加者全員が積極的に交流し、地域での多文化交流の拡大に向けて、地域活動の重要性を再認識する場となった。

令和8年2月に開催した「ふり返し報告会」では、実際に多文化交流会に参加したコーディネーターと外国人スピーカーから、「普段の学習だけでは見えない、一人一人の深い考えに触れることができた」、「通訳者がいてくださったのも、深い話をする上で大きな助けになった」といった意見が共有された。

「ふり返し報告会」の参加者の中には、大阪市内のある区の地域活動協議会の事務局長が参加されており、次年度以降の「多文化交流会」の実施に向けて関心を持たれており、地域の日本語教室と結びつけることで、より地域とのつながりを強化し、活動の拡がりを持たせるきっかけも見出すことができた。

また、アンケート結果では「単発でなく組織的に継続的に包摂のプロセスが進められていることがわかって自分も何かに役立ちたいというモチベーションになった」、「多様な多文化共生への取り組みの成果・課題を聞いて良かった」などの声が寄せられた。また、83%の参加者が「大満足」または「満足」と評価し、交流を通じて新たな気づきやアイデアを得るとともに、日常的なつながりの重要性を感じていただけたことが大きな成果であると実感している。

一方、運営面では、グループディスカッションにおいて「もう少し少人数グループであれば、いろんな人と意見が交わしやすいと思った」「時間が短すぎると感じた」という意見があったことから、次年度以降は、グループ分けや時間配分を工夫し、より深い対話が生まれるよう運営を工夫、改善していく。

このように、今年度については多文化交流会を地域の日本語教室で開催したことで地域住民同士の理解を深め、共生への意識を拡げることができたが、次年度は、日本語教室による自主的な交流会の実施を促すため、通訳者派遣を行うことにより、外国人住民と日本人住民が共に暮らしやすい地域づくりをめざし、今後も地域で継続した取り組みが進むよう支援していく。

■今後に向けての展望 ～次年度以降の方向性も踏まえて～

大阪市における外国人住民の増加は年々顕著であり、令和7年(2025年)12月末時点では211,880人に達し、市の総人口の7.6%を占め、13人に1人が外国人住民となっている。このような状況の中で、外国人住民と日本人住民が地域でつながり、顔の見える関係を築くことがますます重要となってきている。令和3年度より実施している「多文化交流会」(助成を受けての実施は令和4年度より)は、日本人住民と外国人住民との相互理解を深め、その関係構築に寄与してきた。

今年度は大阪市教育委員会(生涯学習担当)との連携のもと、「地域の日本語教室」を中心に、区役所や区社会福祉協議会など行政機関等の参加も得て、市内5カ所で多文化交流会を実施した。参加した教室のボランティアからは、学習者と生活の様子や感じていることを直接語り合えた意義、通訳者がいたことで深い対話が可能になったこと、日常の思いを共有できる貴重さなど、多くの肯定的な声が寄せられた。また、学習者側からも、他国の文化への理解が深まり、悩みを一人で抱えているのではなく多くの人々に支えられていることを実感したとの声が上がリ、日本語教室が単なる「日本語学習の場」を超え、地域の多様な情報共有や互いの理解を促す場として大きな役割を果たしていることが改めて明らかとなった。

こうした「知ろうとする機会」や「つながるきっかけ」を提供する取組みは、多文化共生を推進するうえで極めて重要であり、今後、地域での交流を広げていく土台となるものである。成果の詳細については先の項目で述べたとおりであるが、その蓄積を活かしながら、次年度以降もさらなる発展をめざしていきたい。

次年度以降は、大阪市教育委員会をはじめ、地域の日本語教室の関係者、区役所、各区社会福祉協議会との連携を一層深め、外国人住民と日本人住民とのつながりづくりを継続して進める。また、令和7年度に多文化交流会を実施した教室が、令和8年度には自主的に交流会を開催できるよう、必要に応じて通訳者を派遣し、円滑なコミュニケーションとともに、地域とのつながりの強化を支援する。

また、地域活動協議会や地域団体、NPOなど、地域で活動する多様なアクターにも積極的に働きかけ、多文化交流会が地域活動や住民同士のつながりを生み出す「触媒」となるよう、今年度の反省点を踏まえながら次年度以降も、新規教室での実施や、各教室が独自に交流会を実施できる体制づくりに継続的に取り組み、事業の拡大をめざす。

さらには、本事業の実施を通じて、日本語学習者(外国人住民)やボランティアと、当財団が行う相談事業との連携強化もめざしており、多様な困りごとに対してより適切かつ迅速に対応できる体制づくりが必要となる。そのためにも、行政の窓口である区役所や区社会福祉協議会と日本語教室とのネットワークを強め、地域の中での課題解決を進めるための協働体制の整備を進めていきたい。

地域の日本語教室は、外国人住民と地域社会をつなぐ重要な拠点である。教室を中心に交流が生まれることで顔の見える関係が構築されることにより、多様性と活気に満ちたまちづくりの基盤が形成されると考える。区役所や区社会福祉協議会、行政機関等が参画することで、教室そのものが地域行政との結節点(HUB)として機能し、地域全体を巻き込んだ共生の仕組みへと発展することとなる。

また、外国人住民にとって日本語教室は、言葉や生活の不安を相談できる「身近な拠り所」である一方、制度や法的な問題は専門的対応が求められることが多い。教室と当財団が連携することにより互いの強みを生かした相談支援が可能となり、より効果的なサポート体制が整備される。

特に、災害時には、日常的に通う日本語教室がボランティアとの信頼関係を背景に「安心して情報を得られる場所」として重要な役割を担うこととなり、財団が正確な情報を届けるためにも、平時から教室との緊密な連携体制を築いておくことが不可欠である。

地域の識字・日本語教室は、多文化共生社会の実現に向け、外国人住民・地域住民・行政機関等をつなぐ「共生のハブ(HUB)」として不可欠な存在であり、今後もその役割はますます重要性を増すものと考えられる。地域の日本語教室は地域住民と外国人住民をつなぐ「橋渡し役」として機能しており、多文化交流会はその役割を具体化する仕掛けであると考え。外国人住民にとって、多文化交流会は地域の関係者と知り合い、相談できる場所を知り、地域を身近に感じるきっかけとなり、地域住民や地域団体にとっては、外国人住民と直接出会う機会であり、地域の文化的多様性を理解し、相互理解を深める場となる。また、行政等関係機関にとっては外国人住民の状況把握や情報提供の重要な場とされることから、多文化交流会の実施を通じて、地域の日本語教室の持つ役割や可能性を深化させることができる。

今後についても、地域の多様性を尊重しつつ、外国人住民と地域住民が安心して共に暮らせるまちづくりをめざし、関係機関や地域の関係者と連携を深めながら、さらなる取組みの充実と発展に努めていく。

■ 来場者アンケート結果

アンケート回収率: 28/30

1. 本日のふり返し報告会はいかがですか。

大変満足	満足	あまり満足していない	不満
10	15	3	0

「大変満足」、「満足」の理由:

- ・多文化交流会があることも実態も知りませんでした。
- ・他の教室のことが聞けた。
- ・たいへん満足。
- ・他の交流教室の学習者さんの意見を聞けたところ。
- ・単発でなく組織的に継続的に包摂のプロセスが進められていることがわかって自分も何かに役立ちたいというモチベーションになった。
- ・色々な日本語教室の実態・様子を聞いて良かった。
- ・外国人の声を聞くことができたから。
- ・現場の実態が良く分かりました。
- ・日本語教室の現状(日本語を教えるボランティアが圧倒的に不足していること)が知れたこと。
- ・他の教室の方と意見交換ができたため。
- ・このような機会があることは、日々のボランティア活動の成果や問題点を知るうえで大切だと思いました。
- ・多くの外国人やコーディネータさんの意見や考え方を聞くことができた。
- ・複数の教室が発表されたので、いろんな事例や外国人スピーカーの声を直接聞いたのが良かった。
- ・学習者の意見が聞けた。
- ・率直なコメントを聞くことができた。
- ・様々な国、人の意見が聞けた。
- ・他の教室さんのお話を聞けたこと。
- ・他の教室の状況が良く分かった。
- ・ボランティアとして日本語教室でどのようなことが出来るかのヒントを得れた。

「あまり満足していない」の理由:

- ・各教室の実態があまりよくわからなかった。
- ・外国人の参加が少ない。グループディスカッションのグループが大きすぎる。

2. 期待していた内容と合致していましたか。

はい	いいえ	未回答
23	3	2

「はい」の理由:

- ・前回のムスリム・ハラルの理解とはまた全然違う内容で期待していた訳ではなかったが、とても勉強になった。

「いいえ」の理由:

- ・グループディスカッションが時間が短く、グループが大きいためディスカッションとしてあまり機能していない。

- ・運営上の悩みについて交流したかったです。

「未回答」の理由:

- ・ゴチャゴチャしていた。
- ・初めて参加でしたのでどのようなことをするのかと興味がありました。次回も参加します。

3. このふり返し報告会は、多文化共生のまちづくりへの理解に役立ちましたか。

とても役立った	少し役立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった	未回答
12	13	0	0	3

4. あなた自身は、地域で暮らす様々な文化やルーツをもつ人たちとの関わりはありますか。

普段から言葉を交わす外国人がいる	知っているが声をかけたことはない	意識したことはない	わからない	その他	未回答
18	4	4	0	1	1

「普段から言葉を交わす外国人がいる」理由:

- ・日本語ボランティアをしています。
- ・教室内で他ではあまり会わない。
- ・同じマンションの上階に住んでいる。
- ・隣の方が外国人です。

「知っているが声をかけたことはない」理由:

- ・池田市から参加しました。大阪市内ほど外国人の比率が高くなく、自身も市外の会社に通っているため、そのような人たちとの接点が多くないように感じます。
- ・町で見かけることはあるが、声をかける機会がない。

「その他」理由:

- ・今住んでいる地域に外国人住民がそもそもそんなに多くないと思われるので、交流の機会自体が乏しい。

「未回答」理由:

- ・周り(地域)には外国人はいない。

5. このふり返し報告会に参加して、様々な文化やルーツをもつ人たちと交流を試みようと思いましたか？

とても思った	少し思った	あまり思わなかった	全く思わなかった	未回答
23	4	1	0	0

「とても思った」理由:

- ・今回の外国人の方の発言の中で、日本語教室での交流が安心感を与え、支えてくれている人がついてくれるという言葉聞いてやりがいを感じた。
- ・面白そうだから。
- ・すでに日本語ボランティアにて交流しています。

「少し思った」理由:

- ・関心があるからです。
- ・友達になるきっかけを教えてくれた。
- ・このようなボランティア活動のコンセプトは違いますが、個人的に国際交流の企画をしているので、このような文化交流会に参加できてよかった。(日本に住んでいる日本人と、外国に住んでいる外国人の交流)

「少し思った」理由:

- ・日本語教室のボランティアが、外国語が分からなくても日本語で日本語を教えているという現状を知ったから。
- ・社会に貢献できればと思う。

「あまり思わなかった」理由:

- ・なかなかハードルが高い。時間がない。

6. 今後、あなたの住む地域の日本語教室で、このような多文化多文化交流会が開催されるときに、参加したいと思われましたか。

とても思った	少し思った	あまり思わなかった	全く思わなかった	未回答
16	11	0	0	1

「とても思った」理由:

- ・このようなボランティア活動のコンセプトは違いますが、個人的に国際交流の企画をしているので、このような多文化交流会に参加できてよかった。(日本に住んでいる本人と、外国に住んでいる外国人の交流)
- ・日本住民、外国人住民、お互いの文化を知り、理解することは大事。
- ・面白そうだから。
- ・多文化に興味あり。
- ・日本と外国人とのつながり、日本語を学べる事。
- ・日本人、外国人との相互関係が大事だと思う。
- ・多文化を知りたい。

「少し思った」理由:

- ・そのような案内を見たことがありません。
- ・日頃、外国人と接する機会がなく、外国人を理解するきっかけになると思うから。
- ・日本語教室の機会で、これまでの経験(海外)を活かせればと考えている。

7. このふり返し報告会を通じて、様々な文化やルーツをもつ人々と共に暮らしていくために、大切なことは何だと思われましたか？よろしければ教えてください。

- ・双方のコミュニケーション理解
- ・日本で暮らす上での不安面を少しでも軽くなるような場面・場所を作る。
- ・知り合い、友達を作る。
- ・これらは防災面にもつながると思う。(災害時も)
- ・彼らの不安を解決するための、日常的交流としての会話が必要だと思った。双方向の理解が大切だとも感じた。
- ・様々な文化やルーツをもつ人々を理解すると同時に、日本の文化、慣習、ルールなどを外国人に伝えるように伝えていくこと。外国人を受け入れること自体悪いことではないが、受け入れた結果、どのようなことが起こりえるかを考え、対策を講じていく必要もある。受け入れ体制が不十分なまま受け入れると、外国人、日本人ともに「こんなはずではなかった」となりかねない。
- ・外国人の方の思い、願いを知ること、知る機会を行政が用意する必要があると思う。
- ・普段教室にかかわることのない方々にも外国人が近くに暮らしていることを知っていただくこと。
- ・平和
- ・相互的な働き、自己の言語を話せること、感動する。
- ・大切なこと
- ・心の交流
- ・相手の国の文化を理解すること
- ・興味、関心、好奇心、想像力
- ・行政、地方自治体が場所の提供をする必要がある。ボランティアにまかせきりの感じがします。
- ・日本に住む限り、最低限の日本のルール(日本人でもできない人はいますが)(ゴミ、交通、生活…)は理解してほしい。そのためにもお互いの関係が良くなってほしい。
- ・これだけ多くの外国人がきている現実があるから、交流活動はとても大切です。まず「知り合う」ことから始められると思います。
- ・異文化理解

7. 本日の感想、ご意見があれば、お書きください。

<感想・コメント>

- ・多様な多文化共生への取り組みの成果・課題を聞いて良かった。
- ・様々な意見が聞いて良かった。
- ・「多文化交流会」という活動があることを初めて知りました。
- ・各地域の教室との横のつながりができてうれしい。
- ・色々勉強になりました。
- ・現在の多文化共生がいいですが、限定的な力だと思う。当然素晴らしいと思う。もっとひろげると思う。

<主に、内容について>

- ・学習者の意見をもっと聞きたかった。
- ・外国人の方がどんどん増えているのに、日本語ボランティアの数は増えません。地域のボランティアだけでは、外国人対応が難しいので、行政・役所などが日本に住む外国人をヘルプしてください。
- ・日本語が上達した後、実際日本社会に入ると、外国人を理解しない人、外国人が嫌いな人がいる。その先はどうするかも大切だと思う。一方的ではない、相互的な理解が必要だと思う。

<主に、運営面について>

- ・コーディネーターさんの会話時間を何分と先に決めてほしい。長すぎると個人的意見。
- ・グループディスカッションがもう少し少人数グループで開催されると、いろんな人と意見が交わしやすいと思いました。
- ・グループディスカッションの時間が短すぎると感じました。

■記録写真



理事長挨拶



事務局から実施報告



教室からの報告(市岡日本語教室)



教室からの報告(矢田しきじ教室)



教室からの報告(平野識字教室)





教室からの報告(立葉識字・日本語交流教室)



教室からの報告(出来島識字・日本語交流教室)



グループディスカッション



グループディカッション まとめ